同窓會々報

昭和十三年度同窓會役員左の如し

會長　院長　望月日謙猊下
副會長　教頭　遠藤是妙先生

庶務部　部長　鹽田義遜先生
　　幹事　下郡顯淨君
會計部　部長　中條是明先生
　　幹事　田村啓孝君
辯論部　部長　松木本興先生
　　幹事　清水文要君
文學部　部長　今村是龍先生
　　幹事　熊谷海善君
　　助手　米澤是忠君
運動部　部長　灘上惠教先生
　　幹事　竹谷榮靜君
購買部　部長　福島義孝先生
　　幹事　香川英頂君
　　助手　上田玄忠君

（文學部助手米澤君入營後は帶金一義君が該部助手を引繼ぐ）

……幹事の辭……

本年度同窓會の人的運用機關は、如上のメンバーを以て決定せられた。

直接、會務執行の大任を佩びた吾等幹事一同は、孰れも若輩未熟の者で到底その器ではないが、一度選ばれて退く事は男兒の本懷に非ずとの自覺の下に、目前に横たはる幾多の難局を豫期し乍らも、正義に燃えたつ愛校心の熱情は斷じて躊躇する事を許さず、茲に吾等は「異體同心なれば萬事を成ず」の祖訓を奉戴して會務遂行の原則となし、如何なる迫害艱難にも忍從して所信を貫徹すべく、强固な決意を固めたのであつた。

凡ゆる犧牲を甘受して會務に殉ずる悲壯な覺悟は既に決してゐる所であるが、萬全なる會務の遂行は吾等凡身の容易に實現し難い處であつて、過分の大任とは識りながらも、誠意の一念に酬らるる三寶の感應を仰いで、大過なく一ケ年の重責を完しえらるべく誓願に發して忍苦の壯途に上つた。

爾來會務は着々として進轉し、幾多の成果を收めつゝある。その詳細なる報道は後記の各部報に讓つて、茲に些か吾人の心境を記述するに、今次の事變は、皇室の御稜威と、皇軍の愛國精神に燃える血みどろな奮鬪が、克く銃後の强靱な結束と相俟つて、世界聖戰史上稀に見られる成果を收めつゝあるも、その後に來るべき對支文化工作の任務は、東洋平和確立上極めて重要性を有するものである。而もその大任は偏へに宗教家の雙肩にかゝるものであり、就中立正安國を標榜する宗團人は特に此の大任の本質を熟考し、確實な認識を以て實踐に乘出さなければならない。

宗祖の膝下に育れつゝある祖山學徒にも、將來如上の大任を分擔する重大な責務を課せられつゝある事を考察する時、三・五・八歲の修學期間は如何に大切であるか、今更贅言を要しない。吾等は單なる知識探究のみに止まつてはならない。信心爲本二道精進は一家の鐵則であり、大乘的な慈悲・信念・識見・迫力等の精神的要素が調和的に融合して高遺なる人格に統一せられ頑健なる肉體に具現する時、始めて時代の要求する處の宗教家が完成されるものである。祖山學徒の修學は茲に標準を求めて切磋琢磨の努力を盡さなければならない。

自治行政機關たる同窓會の運用も、今且く在延學徒に約して考察する時は、如上の理想實現に資してこそ、本會の存在意義が發揮されるものである。されば學徒各位は、克く本會の本質的使命を認識して之を有効に運用し、以てその性能を萬全に發現せしむる樣に努むる事が必要である。

終に臨み、本年度は本會に於ても戰時の反映で波瀾の多い歲であつたが、幸ひに會長現下を始め、各部長先生並に諸先生、本山當局の御指導と、先輩諸師、有緣各位、會員諸兄の御後援を得て大過なく會務の大半を遂行する事を得て感激に絕えず、以て滿腔の謝意を表するものである。

（下郡生記）

各部記事

◇庶務部

四月廿一日　選出された吾々は順次定期大會の準備をなしつゝ當日を迎ふ。

四月三十日　第廿七回同窓會定期大會を本學院の講堂にて開催す。午前十時、難波庶務幹事開會宣言、先づ柿沼教授副會長代理として訓辭あり。次いで正副議長決定（議長松木教授、副議長中條教授）直ちに各部の經過報告。引續いて之に對する質疑應答、若干の質問あるも松木議長の痛快なる司會に依り至極順調に進行して間もなく終了す。次いで舊幹事を代表して難波舊庶務幹事の解任挨拶があり、引續いて下郡新庶務幹事の就任の辭があり、ついで下郡庶務幹事本年度豫算案を